

京大坂の文人

幕末・明治

管宗次

今藤真中
ちんちん

上田ちんちん
ちんちんちんちん
ちんちんちんちん
ちんちんちんちん



高氏

高氏
ちんちん
ちんちん



蓮月尼
ちんちん
ちんちん

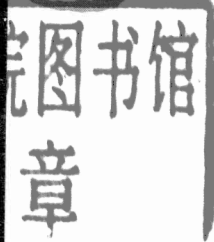
桂有彰
ちんちん
ちんちん

京大坂の文人

幕末・明治

管宗次

上方文庫11



著者略歴

管 宗次（すが しゅうじ）

昭和31年 兵庫県生

昭和55年 青山学院大学卒業

現在 武庫川女子大学非常勤講師

羽衣学園短期大学非常勤講師

金蘭短期大学非常勤講師

大阪市文化財総合調査専門委員

専攻 近世文学・国語学

著書 定本群書一覽（昭和59年ゆまに書房）

国雅管窺・和歌虚詞考（昭和60年和泉書院）

尾崎雅嘉著述三種（昭和61年臨川書店）

群書一覽研究（平成1年和泉書院）

共著 安政浪華尚齒会記と山口睦齋（昭和61年和泉書院）

京大坂の文人 ―幕末・明治―

上方文庫11

1991年7月10日 初版第一刷発行©

著 者 管 宗次

発行者 廣橋研三

発行所 和泉書院

大阪市天王寺区上汐5-3-8(〒543)

電話06-771-1467／振替大阪7-15043

写植 トーヨー写植／印刷 明新印刷／製本 小幡製本

ISBN4-87088-469-0 C1395 定価はカバーに表示

目

次

はじめに

幕末明治京都の文人……3

- (1) 与謝野鉄幹の父礼蔵と園美蔭……12
- (2) 富士谷成章の北辺門 進藤千尋……18
- (3) 幕末女流三歌人 蓮月尼・上田千賀子・太夫桜木……25
- (4) 西本願寺財政改革の功績者 石田敬起……32
- (5) 京都博覧会の歌会宗匠 拝郷蓮茵……38
- (6) 建仁寺の文雅僧 今堀真中……45
- (7) 京都奉行所与力・同心の文雅 吉岡美知・岩本美親……52
- (8) 京都奉行所与力・同心の文雅 森美茂・平川保明……60
- (9) 北辺門最後の学者 赤松祐以……67
- (10) 和歌・狂歌・画の才人 桂有彰……74
- (11) 大坂の富商と京都の神官 室谷家と六人部是香……81
- (12) 赤報隊の記録方 川喜多真彦……89

(13) 妙法院宮の坊官 今小路行巽 … 96

幕末神戸の女流歌人・中西為子 … 102

付・中西芳之和歌短冊 … 133

中西福之和歌短冊 … 145

幕末明治大坂の文人とその周辺 … 148

(1) 田中金峰著『大阪繁昌詩』―父、田中華城の奉納箱書― … 148

(2) 尾崎雅嘉と木村兼葭堂―浪華町人学者交流― … 153

(3) 契沖阿闍梨百五十回遠忌追悼歌集『菴のうめ集』 … 162

(4) 暁鐘成の短冊 … 168

(5) 近世文学にみる種痘と除痘館 … 172

(6) 近藤芳樹の板下 … 180

(7) 池大雅の和歌一首 … 183

(8) 浪華風流月旦評名橋長短録 嘉永六新板 … 184

―幕末期浪華文人見立番付―

〈参考文献〉 …… 198

〈初出一覧〉 …… 201

〈人名・書名索引〉 …… 左開
1

装幀 森本良成

はじめに

江戸時代も中後期になると、『へいあんじんぶつし平安人物誌』・『なにわきようゆうりく浪華郷友録』といった学者・文人の紳士録が京都や大坂では何度も出版される。都が京都から大坂への遷都の件も消えて東京に行ってしまった明治になつて、それは少しずつ印刷の形を変えながらも出版される。

王政復古になつて、明治元年（一八六八）になつたからといつて、それまで文雅で知られた人々が突然に死んで、和歌を詠んだり画を描くことを止めたりするわけではない。明治期の文学青年少女を集めた星篁せいきん派も、主催する与謝野鉄幹よしかのてつかんは京都旧派きゅうはの歌人から和歌の手ほどきを受けており、父も和歌を好む僧であつた。雑誌『明星』めいせいをむさぼるように読み、和歌を寄せる星篁結社せいきんけつしゃの青年少女も、鉄幹と同じく父や祖父、母や祖母が文雅を好むという環境のなかで育つた青年少女であつた。

新しい時代の新しい文学を意識的に感じた者もあれば、無意識ながら豊かな環境の土壌を次の世代に残した者が数多くあつたのも幕末といえよう。

幕末期の文芸が爛熟にあつて退廃的であつたと指摘する書や研究者は多い、確かにそうであつた。しかし、それは一面である。その反面には、爛熟という表現よりは清楚、退廃的という表現よりは誠実な世界に文芸を求めている有名無名の人々が数多くあつたのである。現在では無名有名の、その文

人たちも、『平安人物誌』・『浪華郷友録』を買い求める人であったり、載せられる人であったのである。本書は「中外日報」、住吉大社「すみのえ」、「大阪春秋」などに、連載または、寄稿したものを中心に集めたのであるが、みな、幕末明治の上方文人で意中の人々である。文雅遊芸が本来持っている人格形成への働き、といったことも、伝記と逸話は教えてくれるようである。本書に収めた文人たちのほとんどは、まだまとまった伝記研究のない人ばかりであるのは何よりも本書の取柄だが、みな価値のある人物なり業績のある人々であることを筆者は信じて疑わない。各々の文人たちと、手紙か和歌のやりとりでもする心持ちで読んでいただけたら幸いである。

なお、本書に収めた中心をなす「幕末明治京都の文人」の中外日報連載の御紹介をいただいた片山宏行先生・大森亮尚先生、大阪大学古代中世文学研究会「詞林」に御紹介いただいた藤田保幸先生・伊井春樹先生・佐藤明治先生また、御教示・資料の閲覧に御高配賜わった水田紀久先生・参議院議員中西一郎先生・中西良允氏・川崎一郎先生・田熊渭津子先生・大内由紀夫先生・中尾堅一郎氏・中野真作先生、住吉大社の敷田年博氏・川寄一郎氏・神武磐彦氏・山口勲氏・岡本宣之氏・赤松清氏には篤く御礼申しあげる。特に淡路福良の宮崎昭主氏には、暁鐘成の短冊を御恵与賜わったこと鳴謝申しあげる。校正には、増田知子・平井麻紀子また妻の恭子の協力があつたことを明記しておきたい。

平成三年二月吉日

幕末明治京都の文人

文化の土壌

現在、短歌や俳句を楽しむ人は、どれ位あるであろうか。歌人や俳人の名鑑や年鑑に載る人は、ほんの一部であろうが、その名鑑や年鑑も、氾濫気味といつていい程に出版されているし、店頭に市販されている短歌・俳句の雑誌、結社の同人誌までいれると大変な数に及ぶであろう。それだけではなく、結社にも加わらず、師をも持たずにいる歌人・俳人は少なくないであろう。

こうした文化の土壌や環境を持っている国は、その文化を世界に誇つてもいいであろうが、これ程に広い文化の土壌は、いったいどの時代に確立したのであるうか。

日本の近代化が、近代化にとって余分なものを切り捨ててきたなかで、和歌とか俳句とかいった小さな定型詩で伝統的な文芸を脈々と残してきたのには、勿論、正岡子規まさおかしきなどの本質的な新時代の改革を成した人々があつたからではあるが、新時代の改革にも必要として残された正に本質的な日本人の美的感情・知的美感・日常的情感ともいふべきものが日本人の誰にも共通のものとして存続してきたからである。

* 京都近代化と文化発展に尽力 *

現今、政界の歴々が俳句を記者会見に発表なさる事が多いようであるが、明治の京都に明石博高^{あかし ひろあきら}という文人肌の役人があった。京都らしさと思われているもの、西陣^{にしじん}・京都大学・京都芸術大学・都をどり・鴨川をどり・山公園^{まるとうこうえん}・祇園枝垂桜^{ぎおんしだれざくら}などは、みな明石博高の尽力によるものである。明石博高について紹介しながら、幕末明治の京都の文人について述べることにしたい。

明治の政治家の随筆や日記は、おもしろいとよくいわれる。文章が引き締まり、無駄がない、文章が上手いのである。陸奥宗光^{むつみねみつ}著『蹇蹇録^{けんけんろく}』（岩波文庫所収『新訂蹇蹇録』）はなかでも名著といつてよいであろう。また、軍医総監森林太郎^{もりやうたろう}が文学者森鷗外^{もりおうがい}であるのは有名だが、首相をも務め元老として明治政界の重鎮であった山県有朋^{やまがたありとも}は和歌に熱心で「常磐会の選者に与ふる書」を鷗外に寄せ、鷗外は「門外所見」という歌論を書いている。常磐会は、山県有朋の意向を受けて鷗外らが幹事となつて起した歌会である。

* 旧文化と新文化 *

明石博高も和歌を好んで、桂園派^{けいえんは}の歌人五十嵐祐胤^{いがらしすけたね}に学んでいる。桂園派は、香川景樹^{かがわけき}がはじめた和歌の一派をさしている語で、賀茂真淵^{かもまぶち}の万葉調和歌に対して、古今和歌集を尊び、優雅流麗な詠みぶりを目ざす。桂園派には優秀な門人を輩出し、門人の数も、一説に千人、その流れを汲む者までい



明石博高

『静潤翁略伝』所載

れると一万ともいわれる。明治になると、明治天皇は和歌を嗜まれ、宮中に歌道御用掛として渡忠秋や高崎正風といった桂園派の人々が占めたため、勢力を増すが、正岡子規からは徹底して攻撃されるわけである。桂園派は旧派の代表的存在として、明治期にみなされるが、『田舎教師』で知られる自然主義作家の田山花袋も桂園派の歌人松浦辰男に和歌を学んで大きな影響を受けたことを自ら述べている（田山花袋著『東京の三十年』岩波文庫）のは注目される。

* 明石博高について *

明石博高は役人であって、和歌の宗匠ではない。博高を育ててくれた外祖父は蘭学医で新時代の文化・思想・技術の摂取に熱心な環境であった。和歌は教養修得の一つとして若い頃に学んだわけであるが、晩年までの楽しみともなるのであった。博高は、天保十年（一八三九）十月四日京都四條通堀河西入唐津屋町に生まれた。天保年間（一八三〇～一八四五）は、幕藩体制が揺ぎはじめた頃で、幕府も諸藩も、財政逼迫に莫大な負債を抱えて苦悩していたため、次々と改革を断行しはじめていた。また、天保十一

年（一八四〇）に隣国の中国ではアヘン戦争がおこり、国内では、現在の国家公務員ともいふべき大坂天満の与力、大塩平八郎が窮民救済を掲げて挙兵、続いて国学者の生田万が大塩残党を名乗り越後国柏崎に挙兵という時代の確実な変革期にかかつていた。

明石博高の外祖父の松本松翁、名は善方、通称は弥輔、は早くも文政天保年間（一八一八―一八四三）には蘭学に心を寄せ、蘭学者として有名な宇田川榛斎・藤林普山・小森桃塙らと交り、長崎にも出かけてオランダ人のヘールケ・チュンベルフ・ゾーフ・シーボルトなどの人々から蘭学書や器具、薬物を手に入れている。少年の博高には日本でも最新の学問と書籍が身辺にあったわけである。博高五歳の時に、父の高善、通称は弥平、が没したために、外祖父の松本松翁に養育されたわけであるが、松翁は、博高には当時としてはあらゆる分野で最高の教育を受けさせるべく努力している。これは当時の京都という土地が伝統的文化の最高水準が集結する場だけでなく、新時代の知識や学問も、日本の文化都市として自ら集まってくる場所柄であったからこそ可能であった。修得の順に列記すると、次の如くであるが、あたかも、今日の履歴書のようになる。

初めは桂和章に読み書きそろばん、儒学は神山四郎、五十嵐祐胤に国文学和歌、月照（忍向上人）に国学を、密厳院清厳和尚に仏教、信亮僧正に天台宗を学び、嘉永五年（一八五二）一月、博高十三歳に長ずるに及んで儒医の桂文郁に中国古方医学、外祖父の松翁に蘭方医学、宮本阮甫・武市文造に蘭語学、幕府医官柏原学介に物理学、津藩医の新宮涼閣に解剖学・生理学・病理学・薬物学・

内科・外科・小児科、錦小路頼徳卿に解体術、田中探山に漢方本草学、辻礼輔に化学・製薬術・測量法、錦小路頼言卿に皇方医学を学び、さらに明治元年（一八六八）十月の二十九歳の時には大坂舎密局が開設されると、新知識を得るべく、向学心旺盛な博高はいちはやくハラタマに学んでいる。

明治三年閏十月には、京都府出仕を命じられる、時に、博高三十一歳、新進気鋭の青年政治家の誕生となるのであるが、その年の十二月には府に建議して京都舎密局を開設している。ハラタマを中心として運営されていた大坂舎密局は明治三年十二月にハラタマの契約の任期が満ちてオランダに帰国するとすぐに消えてしまうのであった。舎密局とは、江戸の蘭学者、宇田川榕庵がオランダ語のChemieを音訳して舎密の二字あてたもので、万物離合変化の義で、化学の訳である。舎密局は化学、理学をも講究していた。この京都舎密局が後の京都大学成立の一つの流れとなるのである。博高も、京都舎密局において理化学の研究を続けている。他にも、病院（現在の京都府立医科大学・同付属病院）、医師試験制度・府設電信など京都の近代化に全力を尽くしており、開明的な先進性と、具体的に行動的な行政手腕には目を見張るものがある。

しかし、積極的な欧化によって、様々な愚行が行政によって行なわれていた当時にあつて、彼は心から日本の伝統的文化を愛した人であった。京都は文化財の宝庫であるが、その大きな所有者ともいふべき寺院は廃仏毀釈によって基盤を失い、神仏分離令によって還俗する時に寺宝を売り払い、その資金にあてる者さえあつた。博高は私財をも投じて文化財の四散を防いでおり、天龍寺蔵の刺繍

曼陀羅・禪林寺藏の角龍袈裟・東寺藏の青磁花瓶、祇園会 鷄鉾のゴブラン織・南禪寺藏の清拙将来太古猶太製印金袈裟・東福寺山内萬壽寺の仏殿と本尊などはみなそれにあたる。私財の限界もあれば、国家の宝としての意義を熟慮し、堂宇修理保存金下付を政府に出願している。この時に二千円の下賜金を得た博高は平等院・銀閣寺・金閣寺などの修復保存にあてている。文化財保護保存の始めである。また京都にあった学習院と旧幕府の蔵書を基に、集書院を設けている、これが府立図書館となり、今日の京都府立総合資料館に引き継がれているわけである。

和歌国文学の素養

明石博高の業績のなかで最も有名なものは明治四年（一八七二）三月に西本願寺書院に催された京都博覧会である。これは日本では初の近代意識による博覧会とされている。続けての明治五年の第二回京都博覧会、本願寺・建仁寺・智恩院の三寺院に催されたが、博覧会余興として、歌舞練場を各遊廓に設けている。これが「都をどり」「鴨川をどり」のはじめである。また、この時には歌会も催されており、「祇園会」が和歌の題になっている。みな、国文学にも素養の深い博高によるところである。与謝野晶子のいかにも柔らかな情緒を醸しだす次の和歌（『みだれ髪』明治三十四年八月刊）

清水へ祇園をよぎる桜月夜
こよひ逢ふ人みなうつくしき

も、祇園枝垂桜の美しい円山公園あたりを詠みこんだものであるが、円山公園を設けるのに画策するばかりでなく、伐採されることになっていた祇園枝垂桜を惜しみ、私財から金五円を払い保存に務めた。晶子も今日の我々も、博高の風雅心に心から感謝すべきであろう。行政の合理化、また効率化にはなじまず、最もロスの多い文化に尽す近代人博高のような魅力的な政治家を生み育てた近代の京都も魅力的である。文化はロスが多い故に文化として本来の深さ豊かさを持ち得るのである。

* 京都の文化都市としての意味 *

博高の活躍を追うと、いかにも京都は明治になって、さらに栄えたように映る。しかし、その逆であった。江戸時代、江戸は行政都市、大坂は商業都市、京都は文化都市として三都と並び称せられてきたが、明治になって帝が東京に移られると、一時は西京と名を改められた京都も急速に衰えていった。博高の地域行政は、近代的意識と知識に裏付けられた文化都市形成への方向付けがみられるといつてよく、今日の京都の基盤を築いたといつてまちがいないであろう。それは従来からの京都が持っていた文人的気質を、市民から引き出し、また近代化したうえで、市民に敷衍していったことである。

では、幕末明治から、京都が持っていた文人的気質とその土壌とは何であろうか。京都は、プロでは無いアマチュアで、いわゆる文人はだしが多い。京都には、まず寺院が数多くある。諸派諸宗の学

林も含めると大変な数にあたる。現在の大谷大学・竜谷大学・仏教大学などの元になるものが学林であるが、その学僧までいれると、大学の学生と教員が大きな人口の割合を占める昨今の京都と酷似した都市の姿が浮かぶ。また神官のいる神社も多いし、御所を中心とした公家たちと公家に仕える公家侍、宮中と関わりをもつ日本国中の諸藩の屋敷に勤仕する武士、それらの僧・公家・武士を相手にするマーチャントとしての町人、彼らの社交道具また教養趣味として共通するものは、和歌であり俳諧であり漢詩であり、時には画であつたりもした。京都は芸どころともいうが、文芸を楽しむ人口の多さは、文化の広がりでもあり、彼らは文化の担い手であつて、しかも質の高い享受者である。それは、そのまま文化の質自体を高めることとなる。

京都では、明和五年（一七六八）三月を初めとして、京都の文人士者芸術家を集めて載せた紳士録ともいふべき『平安人物誌』^{（へいあんじんぶっし）}という小冊子が出版されている。同書は、生きている人物だけを載せており、人名（字・雅号・通称）^{（あざな）}、住所を分野別に配列している。所載されるのは生身の人間であるから、人物の交替をみせながら続々と『平安人物誌』は売り出される。

何度も出版されていくうちに、所載する人物の人数は増え、分野も広がりをみせていき、女流の進出も目覚しいものがある。住所も記されているので、地方の人々も『平安人物誌』を買い求めて、手紙を送ったり、上京の際、訪れる時に用いたのであろう。

京都という町は、住んでいる者には、町の端々まで身近に感じる町である。今でも、京都市内に下